創立 10 周年記念行事の概要

An Overview of the RSJ 10th Anniversary Events

谷 江 和 雄* *工業技術院機械技術研究所

Kazuo Tanie* *Biorobotics Division, Robotics Department, Mechanical Engineering Laboratory

(社)日本ロボット学会は平成5年2月で満10年を迎えた。10年を機会に記念事業を行う方針が平成3年度期の理事会で確認され、担当理事をおいて企画を検討することとなった。この記念事業の担当理事として以下に事業企画の背景、企画内容の概略を述べる。

記念事業検討委員会

企画を検討するに際し、10周年記念事業検討委員会を組織した。その委員には、本会の設立経緯に詳しい人々に就任いただいたことはいままでのないが、また、本会設立当時はまだ学生であった若手の会員にも就任をお願いした。何周年事業というものは、過去の歴史を振り返るだけでなく、学会の将来をも考えた企画が望まれ、それには若い会員の意見も重要と考えたからである。委員会のメンバー構成は別表の通りである。

検討委員会では、まず記念事業企画第1案として、本会を現在の隆盛に至らしめるに貢献した人々を集めて記念講演会を実施しようという案や、記念品を配布するなどの意見が出された。しかし、どのような思想に基づいて事業企

画を考えるかを明らかにすることが重要との結論に達し、この点を明確にする議論が初期の委員会では集中的に行われた。その結果、事業を単なるお祭りのイベントとするのではなく、過去の反省の上に立ち、今後10年の学会の方向を示唆するような企画を立てるべきとの基本方針を確認し、次の3種の企画を推進することが了承された。

- (1) 一般社会にも本会の存在をアピールするような企画
- (2) ロボットの実用化を振興/促進する企画
- (3) 若手会員主導の企画

これらに加えて、本記念事業とは独立に従来より進行中の事業の中からタイミングの合う事業、具体的にはロボット用語集の発行をも記念事業の中に取り込でいく方針も了承された。また、事業企画とは別に、10周年を機に学会の体制を見直す必要があるではないかとの意見も出され、体制整備委員会(仮称)の設置を検討することとなった。各事業企画の実施方法については、それぞれにワーキンググループ(WG)が設置され、詳細が検討された。

記念行事の概要

○学会の存在をアピールする企画について

学会は元来、学問分野の進展を目指し、研究発表と技術交流の場を専門家に提供することを役割とする、しかし、学会も社会の一組織であるから、ともすれば難解になりがちな先端学問分野の成果を、社会に理解を持って受け入れられるようにする努力も必要である。こうした努力はロボット技術を一般大衆に馴染み深い技術とするだけでなく、次世代を担う青少年にロボット技術に対する関心を惹起し、将来のロボット技術の担い手を育成することにも有効である。上記(1)はこのような状況認識のもとに取り上げられた企画である。電総研の高瀬國克氏を主査とするWGにおいて、一般社会の各層を対象に、「ロボット：その未来その夢」と題する論文、作文、絵画を募集し、優秀作品を表彰する企画が検討され実施された。この作品募集は本会会誌11巻2号や「子供の科学」に掲載され、全国から数々の応募作品が寄せられた。本会の会長経験者をメンバーとする審査委員会を構成、厳正審査の上、第11回学

10 周年記念事業検討委員会委員構成

委員長	谷江和雄	機械技術研究所
副委員長	増田良介	東海大学工学部電気工学科
幹事	橋野 賢	機械技術研究所
委員	新井民夫	東京大学工学部精密機械工学科
	飯田 詢	飯田技術士事務所
	出澤正徳	電気通信大学大学院
	内山 隆	(株)富士通研究所
	岡野秀晴	(株)東芝
	小菅一弘	名古屋大学工学部機械情報システム工学科
	菅野重樹	早稲田大学理工学部機械工学科
	高瀬國克	電子技術総合研究所
	富田文明	電子技術総合研究所
	中野栄二	東北大学工学部知能機械工学科
	萩原史朗	三菱電機(株)
	藤江正克	(株)日立製作所
	山田陽滋	豊田工業大学制御情報工学科
	山藤和男	電気通信大学機械制御工学科
	吉田和哉	東京工業大学工学部機械宇宙学科
	和田充雄	生命工学工業技術研究所

原稿受付 1994年3月14日

*〒305 茨城県つくば市並木1-2

*Tsukuba-shi, Ibaraki

術講演会において優秀作品が表彰された。その詳細は本会誌の高瀬主査の報告を参照されたい。

○実用化技術を振興/促進する企画について

(2) の企画を提案するにあたっては、過去 10 年の本会の活動の歴史が議論された。その際に指摘されたことは、ロボットの基礎技術の進展に対して、本会は数々の貢献をしてきた反面、ロボットの実用化技術の面では貢献度が必ずしも十分でなかったのでは、という反省である。これは本会だけでなく、ロボット学にかかわる世界の Academic Society が直面している共通の問題でもある。これからの本会の運営にはこうした状況を打ち破る、技術の実用化にスポットを当てた活動の視点が必要との認識のもとに、実用技術の振興/促進に資する企画を立てる方針が打ち出された。具体的には 2 つの企画が提案され、それぞれ WG で実施方針が検討された。企画の 1 つは過去 10 年に開発された優秀な実用化技術の表彰を行うこと (WG 主査 谷江和雄/機械技研)、もう 1 つはロボットの実用に資する先端技術を競い合う最先端ロボット技術コンクールの創設 (WG 主査 中野栄二教授/東北大) である。

本会には既に優秀技術を表彰する技術賞の制度がある。ここで検討された実用化技術賞は技術内容の優秀さだけでなく、その技術が生み出した経済効果や実用実績をも評価の対象とするものである。上記の「ロボット：その未来その夢」作品コンテスト同様、会誌 11 巻 2 号にて応募要領を公表し、全国の企業から応募された技術を審査委員会において厳正審査し、4 件の技術を第 11 回学術講演会において表彰した。その企画立案から表彰に至るまでの詳細、及び受賞技術の詳細は本号の関連記事を参照されたい。

また最先端ロボット技術コンクールは、いわばロボットの「F1 レース」ともいうべきもので、専門家同士が競い合うことによって実用化技術そのものが磨かれるようなコンクールの意図している。10 周年を機にその構想を検討し、できれば平成 6 年度に実施する方針が確認された。中野教授を主査とする WG は記念事業検討委員以外の企業、出版、放送関係者からも委員を招へいし、詳細な議論をへて、コンクール実施要領を完成させた。その具体的内容は本誌、中野主査の報告を参照されたい。

○若手会員企画について

(3) の企画は若手会員が主体的に活動できる雰囲気をもつ本会の従来の特質を再確認するような企画である。本会は設立当初から、活動する会員の平均年齢の低い学会といわれ、またそれが特徴の 1 つにもなってきた。設立の際に積極的に活動した人々のほとんどは 30 歳半ばから 40 歳前半の人々であった。これを反映して、本会の役員の年齢は長い歴史と伝統をもつ他学会と比較して、平均的に低

く、また学術講演会などでも若い会員による活発な意見交換が目立つ。若い会員が積極的に発言しかつ学会の運営に関与できる体質は、学会の活性を維持する上で極めて重要であり、これからもこの雰囲気を維持することが期待される。本会の設立時期に活躍した当時の若い世代も 10 周年を経過した現在では確実に 10 年、歳を重ねており、いまや必ずしも若い世代とはいえない年齢になっている。若い人たちが積極的に活動に参画する学会のイメージを維持する上では、新しい若い世代が活動できる場を学会内に常に用意すると同時に、世代間のコミュニケーションがスムーズに行えるシステムをもつことが必要である。こうした認識のもとに、30 歳前後の会員が主導的に企画する記念行事を開催することとなった。東京工業大学 吉田和哉氏を主査とする若手会員による WG が組織され、具体的企画が検討された。この WG は、email 等による活発な意見交換を通して、「SF ロボットを科学する」と題する一般公開パネルディスカッションの企画を進め、第 11 回学術講演会で実施して、本会の若手会員のパワーの大きさを大衆に印象付けた。このパネルディスカッションの詳細も本号に掲載されているので参照されたい。

○用語集の発行と体制整備

用語集の発行は、本会に以前から設置されているロボット学術用語調査専門委員会 (委員長 長谷川健介桐陰学園横浜大学教授) が進めていた事業を、記念事業に組み入れたものである。記念事業検討委員会副委員長増田良介東海大教授と同委員会の連携のもとで、平成 5 年度にロボット学術用語集「意味付」が発行された。将来的にはロボット用語事典の刊行を計画している。

また学会の体制の見直しについては、体制整備委員会 (仮称) を設置し、本会の将来の一層の発展に向けて、運営体制、経済基盤、会員拡充等の課題を検討することを計画している。

以上、10 周年記念事業の概要を述べた。紹介した各事業は先端ロボット技術コンクールを除き、10 周年を記念するイベントとして行われた 1 回限りの事業であるが、そのうちの一部はこれを機会に継続していけば、本会の活性化に有益と思われるものも含まれている。関係者による検討を引き続きお願いしたい。

10 周年記念の各事業は、検討委員会、各賞に設置された審査委員会等各委員の献身的な努力のもとに企画され、実行された。また実行に際しては、学術講演会実行委員会に多大のご支援をいただいた。さらに、「ロボット：その未来その夢」の企画に対しては、一部企業の協賛をいただいた。各位のご協力に感謝の意を表する次第である。